

2018年度 センター試験 本試験 国語

第1問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	成の心理学』からの出題。 <small>ありものりみみ おかべたいすけ</small> 有元典文・岡部大介『デザイン・リアリティー 集合的達	2017年度に比べて文章量はさらに増え、80分4問の制約があるなかで、この分量を処理するのはハードであり、読解力を測る試験というより日本語の「速読力」を測る試験になり果てているという従前からの批判を免れるものではないだろう。また、問3は、本文を読んだあとに架空の四人の生徒の間でなされた議論を整合的に構成するという新しいタイプの出題形式であったが、基本的には本文中の具体例がどのような趣旨で持ち出されていたかを理解するという正統的な問題で、加えて議論における前後の発言の流れを意識すれば簡単に正解が出せる問題であった。ただ、この出題形式は、「設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付き記述式とし、特に『論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築』や『情報を編集して文章にまとめること』にかかわる能力の

傾向と対策

評価を重視する」という、センター試験に代わる「大学入学共通テスト」の国語の方向性が垣間見えるという点で注目し、同様の設問で記述式の試験であれば解きやすい問題になったであろう。問4が顕著だが、素直に設問・選択肢がつかわれていないために絞りにくい設問もあり、その点で「やや難」と判断した。

本文解説

段落解説

I 世界の多義性（第1～第4段落）

「これから話す内容をどの程度理解できたか、後でテストをする」。講義とは大きな四角い部屋の空気の流れ、あるいは教師のモノローグにすぎないとも捉えられるし、問題解決の有意義なヒントとなる知識とも捉えられる。世界は多義的でその意味と価値は多様な解釈に開かれているのだ。冒頭の宣言は講義という事象の多義性をしほり込む。すなわち、学生にとっての「記憶すべき一連の知識」として設定する作用をもつ。教授者の意図的な工夫、非意図的な文脈の設定、あるいは受講者の意識によって、その場のひとやモノや課題の間の関係、ひとのふるまいは変化しうるのだ。

II 「デザイン」再定義（第5～第14段落）

本来、「デザイン」という言葉は、ある目的を持って意匠・考案・立案すること

と、つまり、意図的に形づくること、と、その形づくられた構造を意味するが、本書ではここまでデザインという言葉で、「ひとのふるまいと世界のあらわれ」という拡張した意味に用いてきた。こうした意味でのデザインを改めて定義してみよう。

「デザイン」のラテン語の語源は、印を刻むことである。人間は自分たちが生きやすいように自然環境に印を刻み込み、自然を少しずつ文明に近づけていったと考えられる。今ある現実には、自分たちの活動のために環境を改変することこそ、人間の何よりの特徴である。こうした環境の加工・人工物化を「デザイン」と呼ぼう。モノの物理的な形状の変化は、アフォーダンス、すなわちモノの扱い方の可能性を変化させ、ひとのふるまいの変化、こころの変化につながる。ひとびとが知覚可能な現実そのものが変化しているのである。デザインを再定義するならば、「対象に異なる秩序を与えること」ということになる。そして、私たちが変化させた知覚可能な現実が、相互反映的にまた異なる人工物を生み出すのだ。

Ⅲ 「行為(こいうダッシュユ)」(第15～第17段落)

私たちの住む現実、価値中立的な環境ではない。文化から生み出され歴史的に洗練されてきた人工物に媒介された、文化的意味と価値に満ちた世界を生きている。自分たちの身の丈に合わせてあつらえられた私たちのオーダーメイドな現実である。人間は、自らが「デザインした現実」を知覚し、生きてきたのである。ここで、あるモノ・コトのデザインによって変化した行為を「行為(こいうダッシュユ)」と呼ぼう。デザイン以前と同じくふるまえるような同じ現実はなく、異なる現実が知覚されている。そうした現実に対応した行為にはダッシュユをふってみよう。ただし、これはどこかに無印(むじるし)の行為、つまりもともとの原行為とも呼べる行為があることを意

味しない。原行為も、文化歴史的に設えられてきたデフォルトの環境デザインに対応した、やはり「行為」であったのだと考える。人間に無印の現実はなく、すべて自分たちでつくったと考えれば、すべての人間の行為は人工物とセットになった「行為」だといえるだろう。

Ⅳ 「心理学(しんりがくダッシュユ)の必要性」(第18・第19段落)

人間は環境を徹底的にデザインし続け、これからもし続けるだろう。心理学が批判されてきた／されているポイントは、心理学実験室での「記憶(きおくダッシュユ)」を人間の本来の「記憶(むじるしきおく)」と定めた無自覚さである。現実をデザインするという特質は人間にとって本質的で基本的条件であると考えられる。そして、人間性は社会文化と不可分のセットで成り立っており、私たちの精神は道具に媒介されているのである。したがって、「原心理」なるものは想定できず、これまで心理学が対象としてきた私たちのこころの現象は、文化的歴史的条件と不可分の一体である。「心理学」として再記述されていくであろう。この「心理学」は、つまり「文化心理学」のことである。文化心理学では、人間を文化と深く入り交じった集合体の一部であると捉える。この人間の基本的条件が自覚された後、やがて、「」は記載の必要がなくなるだろう。

百字要言

世界は多義的であるが、人間は絶えず自分が生きやすいように環境を改変し、それによって知覚可能な現実そのものを変えており、その影響を受けていない人間の行為・心理は存在しないということに自覚的であるべきだ。

(100字)

用語解説

―出典…『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

多義的 一つの語や表現が多くの意味を持つさま。

※いろいろな意味に解釈できるさま。

アフオーダンス 環境や事物が、それに働きかけようとする人や動物に対して与える、価値ある情報。アメリカの心理学者ギブソンの用語。

摂理 すべおさめること。

代わって処理すること。

キリスト教その他の宗教で、紙が人の利益を慮って世の事すべてを導き治めること。

自然界を支配している理法。

レディメイド(レディーメイド)

できあい。できあいの品。既製品。

オブジェの一類型。実用的な既製品に新たな意味を持たせ、芸術作品として提示するもの。デュシャンに代表される。

設問解説

問1 1 5

正解 (ア) ② (イ) ③ (ウ) ⑤ (エ) ⑤ (オ) ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 知識・教養

解説

たかが漢字1問だが、「されど漢字1問」である。本年度は、正解の選択肢を選ぶことはそれほど難しくなく、例年通りの難易度だったといえるだろう。注意したいのは、(ウ)の「乾いた」である。これを「渴いた」と書き間違える受験生が散見された。「渴いた」は、喉にうるおいがなくなつて飲料を求める場合に用いるが、本文では砂が「カワく」場合で、熱などによって水分がなくなることという「乾く」を使うべきところである。このように、傍線部の漢字については本文の文脈を確認しなければミスをしてしまうというケースがあるので、漢字の問題を本文を読むことなく先に解いてしまつたという戦略は採るべきではない。また、(ア)の選択肢の戸籍「抄本」などは、漢字を書くとなると意外と思ひ浮かびにくかつたかもしれない。

学習の際には、傍線を引かれた漢字、選択肢の漢字ともにすべてを書けるようにすること、また語句の意味がわからなかった場合には辞書などで意味を調べて記憶しておくことを推奨する。そのような地道な作業を通じて、本番での失点を防ぐことになるだけでなく、現代文を読むうえで必要な素養が身に着き、読解力が強化されることになるのだ。

解答選択肢

- (ア) 意匠 ①高尚 ②**巨匠** ③交渉 ④昇格 ⑤抄本
- (イ) 踏み ①急騰 ②登記 ③**踏襲** ④陶器 ⑤搭乘
- (ウ) 乾いた ①緩和 ②歓迎 ③果敢 ④干拓 ⑤**乾電池**
- (エ) 摂理 ①切断 ②折衝 ③窃盗 ④雪辱 ⑤**撰取**
- (オ) 洗練 ①旋律 ②**洗淨** ③独占 ④変遷 ⑤潜水艦

問2 6

正解 ②

難易度 ★★☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 内容説明型

解答範囲 (I) (第1～第4段落、特に第1～第3段落)

解説

講義が「素朴に不変な実在とは言いにくい」理由が問われている。なぜ不変な実在と言いにくいのか、と問われれば、端的に言えば「変わりうるから」というような方向性になると思われる。そのことを想定して傍線部を含む第3段落の内容に注目する。5文目に「以上のような多様な捉え方が可能である」とある。また、6・7文目には「世界は多義的でその意味と価値はたくさんさんの解釈に開かれている。世界の意味と価値は一意に定まらない」とある。つまり、講義が「不変な実在」といえない理由は、**講義をはじめとした「世界」には多様な解釈の可能性があるから**である。講義という具体的な「世界」に関していえば、傍線部直後にあるように「考え事をしているものにとつては空気のふるえ」であり、「また誰かにとつては暗記の対象」でありうる。「後でテストをする」という宣言は受講生の授業の聴き方・意味を変え、多義性を絞り込むわけだが、その事実はその宣言がなされる以前には実に多様な解釈が可能であったことを気づかせてくれるのだ。

以上から、「学生にとつて授業の捉え方がさまざまに異なる」や「私たちが理解する世界は、その解釈が多様な可能性をもっており、一つに固定されたものではない」という要素を含み、本文に整合的に構成されている②が正解となる。

不正解の選択肢

①多様な解釈の可能性について言及していないため、誤り。「学習の場にお

ける受講者の目的意識と態度」が「容易に変化していく」ことは、講義が不変な実在とは言いにくいことの理由ではない。授業者の「働きかけ」があらうがなかるうが、違った解釈が可能なのである。

③「授業者の冒頭の宣言がなければ学生にとつての授業の捉え方がさまざまに異なる」という箇所はまったくもって正しいが、「(授業の捉え方がさまざまに異なるように) 授業者の教授上の意図的な工夫は、学生の学習効果に大きな影響を与えていくものである」という箇所が誤り。学生の学習効果の多寡は講義が不変な実在とは言いにくい理由と無関係である。たとえ授業者が意図的な工夫を施しようがしまいが、授業を「大きな四角い部屋の空気のふるえ」としても、または「目の前の問題解決のヒントとなる知恵」としても解釈しうることは変わりがない。この選択肢は「ように」の対応関係がおかしく、かつ「ように」の後半の内容がここでの理由として誤っているのである。

④「私たちを取り巻く環境は、多義性を絞り込まれることによつて初めて有益な存在となる」とあるが、そのようなことは本文に書かれていないため誤り。講義内容を記憶することこそが有益である、という固定観念があるかもしれないが、それはあくまでも、強権的な授業者が自身の授業に集中することを強いるための、あるいは学歴至上主義の、価値観の「植え付け」であり、個々人によつて何が有益なのかはそのときの状況により変わってくるのだ。**このような一般に正しいと思われるような価値判断が選択肢に紛れ込んでいることがあるため、本文で筆者がその価値判断をしていたかを確認することが肝要である。**さらに有益性と解釈の多様性はまったく無関係であり、因果関係は成立しない。

⑤「ひとやモノや課題の間の関係は(再現できるものではない)」とあるが、ひとやモノや課題の間の関係を再現できないことは講義が不変な実在と

は言いにくい理由と無関係である。また再現性についての記述は本文にない。(解釈が固定的でなく流動的であったとしても、一周まわって同一の解釈に行き着くことは可能であり、解釈が不変でないことは再現可能性を否定するものではない。) ちなみに選択肢の前半の「授業者の冒頭の宣言によって学生のふるまいが大きく変わってしまうように、特定の場におけるひとやモノや課題の間の関係は、常に変化していき」という箇所については本文(第4段落)でも言及があり、「素朴に不変な実在とは言いにくい」理由を述べたものとして正しい。

問3 7

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅱ(第5～第14段落、特に第10～第13段落)

解説

本文の内容を踏まえた会話を読んで、空欄を埋める問題である。空欄直後にある生徒Dの二回目の発言と、それを受けての生徒Cの三回目の発言「まさにその通りだね」から、空欄には「『今とは異なるデザインを共有する』』ことよって、『今ある現実の別のバージョンを知覚することになる』』と内容の記述が入ることがわかる。「今ある現実」は「形を変える以前」、「別のバージョン」は「異なる扱い方」、「知覚する」は「気づく」、の言い換えとしてそれぞれ適当であるから、正解は⑤。

不正解の選択肢

- ①「各自の判断」は、知覚した後の段階であり、直後の「今ある現実の別バージョンを知覚することになる」とは別の内容であるから誤り。
- ②デザインが変わることによって「無数に」扱い方が生まれるという内容は本文にないので誤り。
- ③「必要性を実感する」は「今ある現実の別バージョンを知覚することになる」の内容に含まれないので誤り。
- ④「立場によって異なる世界が存在」とあるが、第13段落5文目に「ウェイターだけでなく雇い主にも同時に知覚可能な現実である」とあり、「現実そのもの」が変化するのだから、扱い方に立場は関係しない。よって誤り。

問4 8

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 6分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅲ(第15～第17段落、特に第15段落)

解説

どうしてそのように考えられるか、という理由説明の問題である。この問題は「大変重要なことだと思われる」のはなぜか、という問題であるが、結論からいえば、どの選択肢も「(なぜ大変重要なのかという)重要だから」という構造になっており、トートロジーの様相を呈している。したがって、選択肢全体として「大変重要なことだと思われる」理由を、比較的説得力をもって述べているものを選ぶという相対的判断をとらざるをえない問題であろう。(むしろ「本文の内容と一致する選択肢を選べ」という

問題だと捉えた方が解きやすかったかもしれない。)

まず傍線部中の「このこと」の指示内容を確認すると、傍線部直前の「人間が『デザインした現実』を知覚し、生きてきたといえる」という箇所が該当する。これは、人間が生きている現実自分たちが生きやすいように「文化的実践によって」「身の丈に合わせて」既存の秩序を改変し、そのように変わった現実を知覚して生きてきたということである。第14段落では、はき物の例を用いて、人間がはき物をデザインし、知覚可能な現実を変え、そして人間はそのような変化した現実を知覚して生きていと述べられている。各選択肢前半の「現実」の説明としてはこのような内容と適合するものでなければ本文の趣旨からはずれないことになる。

傍線部のいう「人間を記述し理解していく」という状況を近辺の文脈に即して具体的に検討してみると、第15段落5文目に「人間の文化と歴史を眺めてみれば」とあることから、人間とはどういうものか、ということを経典的歴史的な側面に着目しながら記述し理解していくことだろうと考えられる。この観点で考えると、選択肢③の「自分たちの生きる環境に手を加え続けてきた人間の営為をふまえることが重要になってくるから」という後半がこの状況には適合しているといえる。

前半の「現実」の説明と後半の記述の状況適合性から、③が正解と考えるのが妥当。

それぞれの選択肢が長い問題は、その共通部分や要素間の因果関係に注意しながら、どこがどのように違っているのかを緻密に精査する必要があるだろう。(本問ではいずれの選択肢も「現実は」そのため、人間を記述し理解する際には、**〜が重要になってくるから**。」という構造になっている。)

不正解の選択肢

① 現実とは「常に工夫される前の状態、もしくはこれから加工すべき状態」ではなく、工夫された後の状態であるから誤り。また、いわゆる「無印」の現実が存在しないため、一切の人為の介入がないことを想起させる、「自然状態」というワードにも疑問が残る。

② 自然に適合して人間が変化するという内容であるが、本文は人間が自然に手を加えるという方向性であるから誤り。また、前半の「運命や限界を乗り越えてきた」という表現が曖昧な点も気になる。

④ 人間は「自分たちの身の丈に合わせてあつらえられた私たちのオーダーメイドな現実」で生きており、その現実とは「価値中立的な環境」ではない以上、確かに「あつらえた世界でしか人間は生き」ていないが、「あつらえられた世界でしか人間は生きられない」とまではいえない。仮に「生きられない」としても、いわゆる「無印」な現実が存在しないので「生きられない」という事実とはほとんど情報量がなく、人間を記述し理解していくうえであまり意義がないといえるだろう。また、前半についても、「現実とは、特定の集団が困難や支障を取り除いていく中で形づくられた場」という表現は、人間が「取り除いてきた」ことにしか言及しておらず、現実そのものを改変してきたというニュアンスがない点が気になる。

⑤ 「創造する力」について、本文に記述がないため誤り。また、前半の「現実とは、人工物を身の丈に合うようにデザインし続ける人間の文化的実践と、必然的に対応している」という表現は、人間が現実そのものを改変していること、現実もまた人工物であることを明確に表現していない点が気になる。「必然的に対応している」というよりむしろ現実とは「人間の文化的実践によって生み出された場」なのである。

問5 9

正解 ①

難易度 ★★☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 内容説明型

解答範囲 〈IV〉(第18・第19段落)

解説

「心理学(しんりダッシュユ)の必要性」とはどういうことか問われている。心理学に関する話題は第18段落から始まっている。心理学実験室での「記憶(きおくダッシュユ)」を人間本来の「記憶(むじるしきおく)」と定めた無自覚さが問題点として浮上している。なぜその無自覚が問題なのか。前文の「このことの無自覚」の指示語を把握すると、「人間は環境を徹底的にデザインし続け、これからもし続け」、「動物にとっての環境とは決定的に異なる『環境(かんきょうダッシュユ)』を生活している」、「それが人間の基本的条件」だということに無自覚だということである。つまり、人間の基本的条件たる、環境をデザインし続ける＝「環境」のもとで生活しているということとを自覚しないで、本来「環境」であるところの実験室での「記憶」を、「記憶」として記述し、理論を構築している点が問題なのである。そうだとすると、傍線部の意味もおおよそ想像がつく。「心理」ではなく、あくまで「環境」のもとで発生した「心理」を記述しているのだ、自分たちが研究している対象はあくまで「心理」なのだ、ということとを自覚する必要がある、そうしたものとして再記述されていくべきだ、といった方向性であろうという推測ができる(二)の**ような推測は本文を読みながら働かせられるのが理想的である**。

この推測が正しいか、第19段落を読んで確認しよう。

第19段落の傍線部の直後を見ると、傍線部に対して「人間の、現実をデザ

インするという特質が、人間にとって本質的で基本的な条件だと思われるからである。」とあり、また『「原心理」なるものは想定できず、これまで心理学が対象としてきた私たちのこころの現象は、文化歴史的条件と不可分の一体である『心理学』として再記述されていくであろう』とあり、最後に「この人間の基本的条件が理解された後、やがて『』は記載の必要がなくなるものだと思われる」とある。やはり、先ほどの推測が正しかったことがわかった。したがって、必要な解答要素としては、「**現実(環境)をデザインし続ける**という人間の基本的条件」を自覚すべきだということ、これまで心理学が対象としてきた私たちのこころの現象とは、人間によってデザインされた**現実(環境)の影響を受けた「心理」(文化歴史と不可分の心理)**であるということ、そうしたことに自覚的な「心理学」(文化心理学)が(人間の基本的条件が理解されるまでの当面の間は)必要だということ、である。これらの要素を含み、本文に整合的にまとめた①が正解である。

選択肢はいずれもこれまでの心理学と対比して「心理学」が必要である、という構造になっているため、これまでの心理学と「心理学」の説明としてそれぞれ正しさに注意しながら選択肢を選ぼう。

なお、**本問は、二次試験で記述問題が課される場合にはその基礎練習としても十分利用できる**ものである。自分が記述式で解答するとすれば、どのような解答を書くか考えてみよう。

不正解の選択肢

②「人工物に媒介されない行為を無印の行為とみなし、それをもとの原行為と想定して私たちのこころの現象を捉えるこれまでの心理学」とあるが、まず人工物に媒介されない行為＝無印の行為は人間についてはその基本的、本質的条件ゆえに存在せず、また、従来の心理学は無印か、「」が

付いているのかについての自覚がなかったのだから、無印の行為だけを対象にするという考えをもちようがなかったのである。さらに、後半の「人工物化された新たな環境に直面した際に明らかになる人間の心理を捕捉して深く検討する」とあるが、本文では「人工物化された新しい環境に直面した際」の心理だけを対象とするとは述べられておらず、「心理学」の説明として不適當である。

③ 「心理学実験室での人間の『記憶』を動物実験で得られた動物の『記憶』とは異なるものとして研究する」の部分が「心理学」の説明として不適當。動物実験の話は本文に記述がない。選択肢全体として、価値中立的な動物と文化的意味や価値に満ちた人間との対比が展開されているが、ここでは人間がデザインした環境に人間心理が影響されていることを踏まえているか否かの対比である。

④ 「私たちのこころの現象を文化歴史的条件と切り離れた現象として把握し、それを主要な研究対象としてきた既存の心理学」とあるが、既存の心理学は自覚的に「こころの現象を文化歴史的条件と切り離れた現象として把握し、それを主要な研究対象としてきた」わけではないため誤り。また、「既存の心理学よりも『心理学』の方が必要」とあるが互いの必要性を比較するような議論ではない。

⑤ 「ある行い（「行為」）の結果と別の行い（「行為」）の結果とが同じ場合には両者の差異はないものとして処理する心理学」とあるが、従来の心理学は「行為」と「行為」とを自覚的に区別しておらず、結果が同一なときに同視するというような記述も本文に存在せず、心理学の説明として不適當であるため誤り。

問6 10 . 11

正解 (i) ④ (ii) ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 へI（第1～第3段落）

解説

(i) 選択肢のうち、適當でないものを選ぶ設問である点に注意して順に選択肢をみていく。

① 確かに第1段落の一文は第2段落以降の「授業」についての話題へと誘導する会話文である。また、第2段落においてその具体的な状況説明がなされており、この選択肢の説明は適當であるといえる。

② 第3段落5文目から、「大きな四角い部屋の空気のふるえである。」というのは、「講義の語りの部分」の「多様な捉え方」の一つであることがわかるので、確かにこれは「授業者の口から発せられた音声」についての表現である。また、この「捉え方」は「考えごと」をしているものにとつてのものであるという。つまり、「考えごと」によって授業者の言葉の意味の認識が阻害され、「講義の語り」を単なる「物理的な現象」としてしか捉えられていないことを暗示する表現であるといえ、この選択肢の説明は適當である。

③ 「デザイン」についての新しい見方を示したノーマンの『誰のためのデザイン』について、昔に書かれた書物といった意味で「古典」という表現を筆者が用いているとは考えにくい。「古典」というのは、後世においても読まれるべき価値のある書物という意味をもち、この場合はこちらの意

味であると考えられ、この選択肢の説明は適当であるといえる。

④この文章は二人の著者によって書かれたものであり、第5・第6段落では、自分たちについて「私たち」という主語を用いている。選択肢において取り上げられている部分のうち、後者は確かに人間という大きな主語を「私たち」として表現し、筆者と読者を一体化して扱っているといえるが、前者は筆者の考えの提示でしかなく、この場合の「私たち」は単に筆者の二人のことを指しているにすぎない。よってこれが適当ではない選択肢である。

以上より、正解は④。

(ii)

選択肢にはすべて「具体例」という言葉が用いられているので、これに注目して本文の構成を考える。

この文章は、まず第1〜第4段落で「講義」についての具体例を挙げ、そこから一旦これまで筆者が言及してきた「デザイン」についての話題へと移り、これを踏まえて第9段落において「講義」の例に解釈を加える。そして、第10段落からは「デザイン」の「変化」によって現実の「知覚」もまた「変化」という話題に移り、これについて今度は「カップ」という具体例を挙げ、ここから「アフォーダンスの情報」の「変化」について考える。第14段落以降は、これまでのデザインの定義にもとづいて、人間が絶えず変化する「デザインした現実」を生きしており、「デザイン」によって変化した「行為」「記憶」「環境」といったものについて考察する。この考察の中でもまた、「本」「台所ブーツ」「足し算」といった具体例が用いられている。最後に人間による「環境」のデザインについての内容を受け、従来の心理学への批判と、「文化心理学」の必要性について述べている。

このような文章の構成を踏まえて、選択肢を見ていく。

①「最後に（主題の）該当例を挙げて統括を行っている」とあるが、「心理学」についての内容は主題の該当例ではなく、主題を「心理学」に適用することで導かれる結論である。したがって、この選択肢は誤り。

②「具体例を複数列挙して」とあり、確かに複数具体例は登場しているが、そこからそれぞれ異なる議論を展開しており、その内容は「共通点」にもとづくものとはいえない。したがって、この選択肢は誤り。

③「結論部で反対意見への反論」とあるが、そのような内容は記述されておらず、この選択肢は誤り。

④確かに本文は具体例を示し、それについて抽象度を高めた議論をその都度行うことで論理が展開していくという形になっているので、この選択肢の説明が最も適当である。

以上より、正解は④。

(昆野祐己、小島朋朗、丸岡賢人)

2018年度 センター試験 本試験 国語

第2問 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	井上荒野 <small>いのうえあれの</small> 「キュウリいろいろ」の一節からの出題。	描かれている人物や時代背景について、特に注意すべき点もなく、受験生にとって比較的読みやすい文章だったのではないだろうか。自分の行動や身の回りの出来事をきっかけに、郁子がどのような心情を抱いたのかに注目して読み進めるとよいだろう。 設問の難易度としては、例年通りの難易度であったといえる。問1は、2017年度と同様、辞書的な意味に適合するものを選べば解答が決定するような問題だった。問2の理由説明問題は、明確な根拠を本文から見つけ出すのが困難であったため、「ここ」で出鼻をくじかれた受験生も多かったかもしれないが、あわてることなく、「本文に明確な根拠のある選択肢を選ぶ」という基本に立ち返って問3以降の問題に取り掛かることが重要であった。

本文解説

段落解説

I 「キュウリの馬」(1～34行目)

息子の草が亡くなってから、三十五年間お盆になると郁子はキュウリで馬を作り、茄子で牛を作るといふ旧習を続けてきた。息子に馬に乗って帰ってきてほしかったし、一緒に連れて行ってほしかったのだ。あるとき、郁子がキュウリの馬を作っていると夫の俊介に無邪気な表情でからかわれて、郁子は腹が立ってその意図を夫に打ち明けてしまう。夫からそれまでの無邪気な微笑みが消え、暗い、寂しい顔になった。郁子はいつも後悔はするのだが、なぜか舌が勝手に動いて憎まれ口をたたいてしまうのだ。そういうことが幾度もあった。夫はいつも黙り込むだけだったが、いちどだけ別れを切り出されたことがあった。郁子はとうとう夫がその言葉を放ったことに戦きながら、それを悟られまいと即座に「いやよ。」と答えた。「あなたは逃げるつもりなのね？ そんなの許さない。わたしは絶対に別れない。」郁子のその言葉は虚勢でありながら、本心でもあった。息子の死、息子の記憶にひとりで向き合い、耐えきれぬはずがなかったからである。だから、昨年夫が死んだときには、怒りがあった。「とうとう逃げたのね。」怒りは悲しみよりも強かった。夫が亡くなり、はじめてひとりでお盆を迎えた郁子は、息子と夫にそれぞれ一頭ずつキュウリの馬を作った。「帰りの牛がないけれど、べつに帰らなかつたっていいわよねえ。」「そのままずっとわたしのそばにいればいい。」「写真の夫が苦笑したように見えた。亡くなる少し前に友人夫婦と山へ行ったときに撮ったスナップである。写真の愉しげなゆったりとした表情は郁子と話しているときのものだ。後に友人から告げられた。本当かしら、と郁子は思った。

数日前、俊介の元・同級生石井さんから俊介の写真を借りたと言われた。

この写真を貸すことはできるが、そうすると返ってくるまでの間、書棚の額の片方が空になってしまう。夫と暮らした約四十年間の間に撮って溜まった写真は押し入れにあったが、それをなかなか取り出すこともできなかった。

Ⅱ 「電車に乗って」(35～70行目)

郁子が電車に乗ると、少し離れた場所に座っていた若い女性が郁子に席を譲ってくれた。その女性は男性と二人連れらしく、恋人同士か夫婦になったばかりの二人に見えた。三十数年前、ちょうど今の女性くらいの年頃、同じこの電車に乗って同じ場所を目指していたことがあった。時間もちょうど同じくらい。そして、同じように郁子は席を譲られたのだった。譲ってくれたのは年配の男性だった。男性の妻が郁子の隣に座っており、その夫婦と俊介と郁子とでいくらかの言葉を交わした。男性の妻が「何ヶ月くらいですか?」と郁子に訊ねた。郁子はそのとき息子の草を妊娠していたのである。しかし、まだ四ヶ月で郁子のお腹はまだほとんど目立たない頃だったため、夫は「よくわかりになりましたね」と不思議がると、男性の妻は「経験者ですから」と笑い、男性も「奥さんじゃなくてご主人(俊介)の様子を見ていればわかります」と笑ったのだった。

郁子はトートバックから俊介の写真が十数枚入った封筒を取り出した。結局、遺影はそのままにして、同級生にはこの十数枚のうちのどれかを使ってもらうつもりだった。十数枚も持ってきたのは石井さんのためではなく、自分のためであるように思えた。写真なんて見たくない、見ることもなくていいと意固地になっていた郁子だったが、一度押し入れから写真の入った箱を取り出して開けると、何度も見返しても足りなかったのだ。郁子は夫も自分も、息子が亡くなったあとも、いつしか外に出て行くようになり、そして笑うようになっていたことを改めて写真の中に確認して強く驚いた。郁子は

まるで見知らぬ他人を見るかのようにそれらを眺め、それが紛れもなく自分たちであることを何度も確認した。

Ⅲ 「夫の元・同級生と巡る夫の過ごした町」(71～109行目)

改札を出るとすぐに俊介の元・同級生の石井さんに声をかけられた。郁子は、写真は自ら石井さんに持っていきたい、そのついでに俊介が若い日を過ごしたあちこちを訪ねて歩くつもりだと石井さんに事前に言っていた。写真を渡したら自分ひとりでもぶらぶら歩くつもりだったが、石井さんは案内する気満々でやってきたようで、「炎天下に歩きまわったら倒れるから」と、当たり前のように自分の自転車の荷台に乗るように言った。郁子は少し驚いたが、乗せてもらうことにした。

夫と一緒にいたばかりの頃に一度来て以来、この町を来訪することはなかった。この町にひとり暮らししていた義母も数年後に夫の兄夫婦と同居することになり、家と土地は売却されたからである。一度訪れた際にも、郁子が妊娠中だったこともあり駅から夫の実家へ行く道以外は通らなかった。それでも今、自転車のスピードに合わせて行き過ぎる風景のところどころに、懐かしさや既視感を覚えて郁子ははっとした。

十分も走らないうちに俊介の母校に着いた。二十年前くらいに共学になっていた、校舎も新しくなったらしい。校庭では女生徒たちがハードルの練習をしている。正門から正面の校舎まで続くケヤキ並木を通って裏門に出ると、石井さんは校内も見ることが勧めたが、郁子はその必要はありませんと答えた。何かを探しに来たわけではなかったし、もしそうだとしても、もうそれを見つけたような感覚があったのだ。夫に何かの拍子に高校時代の話が聞かされるたびに、その時代の彼に会ってみたいと思っていた。そして頭の中に思い描いていた男子校の風景が、今、自分の心の中から取り出されて、眼前にあ

らわれたのだという気がした。それが、夫を憎んだり責めたりしている間も、自分の中に保存されていたということに郁子は呆然とした。呆然としながら、詰襟の学生服を着た十六歳の俊介が、ハードルを跳ぶ女子学生たちを横目に見ながら校舎を横切っていく幻を眺めた。(俊介が通っていた頃は男子校であるため、校舎に現在郁子の見ているような「ハードルを跳ぶ女子学生」はいなかったはずであり、その意味でこうした情景は紛れもなく幻である。)

百字要旨

亡くなった夫の写っている写真を見返すと、一人息子が亡くなってからも自分たちは笑って過ごしていたことを再確認し、夫の母校を訪れた際には夫の高校時代を夢想し、自分の心の中にいつも夫がいたことに驚いた。

(98字)

用語解説

― 出典…『広辞苑 第六版』(岩波書店)

虚勢 うわべばかりの威勢。からいばり。

設問解説

問1 12 5 14

正解 (ア) ② (イ) ⑤ (ウ) ⑤

難易度 ★★☆☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 知識・教養

解説

(ア)

「腹に据えかねる」は「怒りを心の中にとどめておけない。我慢できない。」という意味の言葉である。この意味がほぼそのまま書かれている②が正解である。文脈から考えると、①や⑤も当てはまるように感じられるが、傍線部の言葉が本来もっている意味から離れてしまう。多くの言葉の意味を知っておくことは、この問1のような問題で点数を確実に取るだけでなく、文章を読み解くうえでも重要になってくる。自分の語彙力を強化する努力を日頃から重ねておこう。

(イ)

「戦く」は「おの恐ろしさや寒さのために震える」という意味の言葉である。夫がついに「別れようか」という言葉を使ったことに「戦いた」という文脈から考えると、「おの恐ろしさや寒さのために震える」という意味であるとわかるだろう。「恐ろしさ」や「震え」を「おびえながら」という言葉で表している⑤が正解となる。文脈から考えると、②も当てはまるように感じられるが、「おの」でも、辞書的な意味が最終的な決め手となった。

(ウ)

「枷」は刑具の一種で、手足にはめることでその自由を奪う道具である。したがって、「枷が外れる」とは、「自由を制約するものがなくなる」という意味である。この意味がそのまま書かれている⑤が正解である。

前後の文脈から考えても、正解にたどり着ける問題であった。「写真なんて見たくない、見ることもなんてできない」という自分の意固地さが「枷」であり、その「枷が外れ」たから、郁子は夫の写真を何度も何度も見るように

なったのである。

問2 15

正解 ③

難易度 ★★☆☆

所要時間 4分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 へI(1～34行目、特に1～24行目)

解説

まず、傍線部の直前の内容をおさえよう。夫である俊介はすでに亡くなり、郁子はひとりでお盆の季節を迎えていた。そこで、郁子は夫と息子の乗る、二人分のキュウリの馬を作り、「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい」と思っていた。その時、郁子には「写真の俊介が苦笑したように見えた」のだという。

「キュウリの馬を作る」というのは夫が亡くなってから始めたことではなく、息子が死んでから三十五年間、お盆になると、郁子は息子が乗るための、そして息子と一緒に自分も乗って息子のもとへ連れて行ってもらうためのキュウリの馬を作っていた。そして、昨年夫が亡くなり、今年は息子の分に加えて夫の分の馬も作ったのである。このキュウリの馬をめぐるのは、生前夫とひと悶着があったことが7行目で降語られている。どうやら夫が「苦笑」に見えたことはこの事情が関係していそうである。

あるとき、息子の馬を作っていたら、夫に「君はほんとにそういうことを細々と熱心にやるね」とからかう口調で言われ、それに対して郁子は腹を立て、「あの子と一緒に乗っていけるように、立派な馬を作ってるのよ」と言い返し、夫は黙って、暗い寂しい顔になったのだった。からかったときには

夫は「無邪気な微笑み」を浮かべていたことを考えると、そこまで郁子が本気でキュウリの馬を作っているとは思っておらず、お盆の旧習(むろんキュウリの馬を作ったところで死んだ息子に会えるわけではない)に忠実な郁子の熱心さを無邪気からかかったただだと推測される。郁子に言い返された夫が「暗い、寂しい顔」をしたのは、からかったことを申し訳なく思うだけでなく、郁子にとつての自分の存在意義がないように思えたからであろう。実の息子を失ったことは何かで埋め合わせができるようなものではないだろうが、自分は痛みを分かち合ったり、少しでも痛みを和らげたりできていなかったのだろうか、むしろ自分は息子のことを思い出させる引き金になっていただけなのではないか、郁子は息子の元へ行きたいと願っているが、その馬に自分は一緒に乗せてもらえるのだろうか、郁子は息子のところへ行つて夫の元に戻つてくるのだろうか…。こうした感情が後の「別れようか。俺と一緒にいることが、そんなにつらいのなら…。」という発言につながったのだろう。

さて、キュウリの馬についてこういった出来事があったわけだが、今回夫が亡くなって、夫の死には怒りを覚えたものの、郁子はちゃんと夫の分の馬も作った。そして、「帰りの牛がないけれど、べつに帰らなくなつていいわよねえ」「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい」と思っている。これを受けての「苦笑」である。その「苦笑」の理由を検討してみると、「また忠実にキュウリの馬を作ってるよ」「今度は自分の方に来いって言うのか」「キュウリの馬って息子と二人でも乗れるものだったんじゃないのかよ」という軽いあきれ・からかいや、キュウリの馬に関する過去のいさかいへの気まずさ、その一方で自分の馬も作ってくれたこと、ずっとそばにいてほしいと思ってくれていることへのうれしさが混ざり合った感情を夫が抱くように思ったからだと考えられる。

以上の内容に近いことが述べられている③が正解となる。③では「息子の元へ行きたい」と「息子も夫も自分のそばにいてほしい」というのを対比的に捉え、「身勝手」と評価している。やや恣意的な感否めないが他の選択肢に事実関係の誤りが意図的に組み込まれているため③以外に選べるものはない。

本文の内容から解答の根拠を探し出すのが非常に難しく、また正解の選択肢も断定的な表現をしているため、いきなり選ぶのは不安が残る。そこで、左の《不正解の選択肢》のように、明らかに間違いだとわかる部分を見つけて出して消去法で解くのも一つの手だろう。

不正解の選択肢

①「ずっとわたしのそばにいればいい」と言っている夫のことを「今も憎らしく思っている」とはいえないうえに、「夫は嫌な気持ちを抑えて許してくれるだろう」という内容は本文に不在なため不適。

②夫自身が黙り込むだけだったことについて、「後ろめたさを感じ」ているという内容は本文に不在なうえに、それを「今も笑って聞き流そうとしている」から「苦笑」しているのではない。郁子が感じているのは、郁子に向けられた夫の「苦笑」である。したがって、この選択肢は不適。

④以前夫が郁子のことをからかったときに浮かべていたのは、「無邪気な微笑み」であり「皮肉交じり」の笑みではない。また、「皮肉交じりに笑う様子を「苦笑」と表現するのも、適切であるとはいえない。したがって、この選択肢は不適。

⑤「夫に甘え続けていた」と今更気づいた自分の頼りなさ」という内容は、本文において一切述べられていないため不適。

問3

16

正解 ①

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅱ(35～70行目、特に37～47行目)

解説

傍線部に書かれた出来事をきっかけにした郁子の心の動きを問われているので、傍線部以降の文章に目を向ける。郁子に席を譲ってくれた女性は、「彼女の前に立っていた男性と二人連れらしかった」、「恋人同士か、夫婦になったばかりの二人だろう」、「三十数年前、ちょうど今の女性くらいの年の頃、同じこの電車に乗って同じ場所を目指していたことがあった。」といった本文の記述からわかるように、郁子は男性と二人連れの若い女性に席を譲られたことをきっかけに、自分が夫とともに同じ電車に乗ったときのことを回顧している。三十数年前、郁子は妻を連れた「年配の男性」に「席を譲られ」、「四人でいくらかの言葉を交わした」のであった。郁子は当時妊娠していたが、まだ妊娠四ヶ月で、「お腹はまだほとんど目立たない頃だった」。それにもかかわらず、「男性の妻」は「主人の様子を見ていれば（郁子が妊娠中であることは）わかります」と言った。これは、郁子は妊婦であるようには見えなかったが、俊介が「妊婦の夫」のような様子・振る舞いをしてい たということである。その振る舞いとは、具体的には電車の乗り降りを手伝ったり、どこかに空席がないかと定期的に車内を見渡したり、といったような妊婦たる郁子への気遣いだと考えられる。「経験者」たる年配の男性にはわかるくらいに、俊介は郁子のことを気遣っていたのである。そしてそのときのことを思い出すことによって、郁子は当時の自分たちに思いをさせてい

るのだ。

以上の内容を過不足なく盛り込んだ①が正解である。

不正解の選択肢

- ② 「席を譲ってくれた年配の夫婦と気兼ねなく話した出来事」を回想した、という前半の記述は正しいが、席を譲ってくれた女性が離れた場所に移動したことに對し、郁子が「物足りなく」思っているとみられる記述は本文中にない。よって、②は不適。
- ③ 「若くて頼りなかった夫」という記述が誤り。他人が見てもわかるほど郁子を氣遣っていた夫が「頼りなかった」とはいえない。また、前半の「まだ席を譲られる年齢でもないと思っていたのに」という記述も本文にない（「まだ席を譲られる年齢でもない」のに譲られたために郁子が「面食ら」と断定することはできない）。よって、③は不適。
- ④ 「不思議な巡りあわせを新鮮に感じている」という記述が誤り。三十数年前に席を譲られた時と同じ電車で女性に席を譲られるという偶然の重なり、新鮮味を感じたのではなく、むしろそれをきっかけに、昔の出来事を思い出して懐かしさを感じている。よって、④は不適。
- ⑤ 「時の流れを実感している」という記述が誤り。郁子は、過去の経験に思いをはせているのであり、三十数年という時が過ぎ去ったことに對する思いを抱いているというような記述は本文にない。また、女性に席を譲られる多少面食らいながらも「どうもありがとう。」と「お礼を言って」いるため、「いささか慌てる」という表現も疑問が残る。よって、⑤は不適。

問4

17

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 4分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅱ(35～70行目、特に58～69行目)

解説

傍線部は、夫と自分が笑顔で写っている写真を見た時の郁子の心情を問うているので、写真に写る夫や自分について詳しく書かれている56～69行目を参照する。郁子は、「結婚したばかりの若い頃のから、亡くなった年のものまで」に渡る俊介の写真を見ていく中で、「幸福そうな俊介の写真」が想像よりも「たくさん」あり、そうした写真が「草がいたころだけでなく、そのあとも撮られている」ことに気づく。ずっと「二人とも家に閉じこもり、写真を撮ることも撮られることにも無縁だった」わけではなかったのである。また、郁子自身も笑顔で何枚かの写真に写っていた。「植物が伸びるように人間は生きていく以上は笑おうとするものだ」ということはわかっているつもりであったが、写真を見ることによって、いつの間にか息子の死を乗り越え、外へ出て、笑うようになっていったことをあらためて実感し「強い驚き」を感じたのである。

このような内容を過不足なく盛り込んだ④が正解。

不正解の選択肢

- ① 息子を亡くした2人は悲しみにくれていたが、「葛藤」というべき相反する気持ちをもっていたという記述はみられないため、「そのような心の葛藤は少しも見いだせず」という記述は不適切である。よって、①は不適。

また、いつのまにか自分たちが悲しみから抜け出そうとしていたことに気づいたという内容に触れられていない、という点でも誤りといえる。

②「息子を亡くした悲しみに耐えて明るく振る舞っていた夫」という記述が誤り。64行目の「草が亡くなってしばらくは二人ともじつと家に閉じこもり」という記述から俊介も郁子と一緒に悲しみに塞がれていたことが読みとれる。また、郁子が夫から「距離をとりつつ自分は生きてきたと思っていた」という内容も本文からは読み取れない。さらに、郁子は、11行目に「憎まれ口が飛び出す。そういうことが幾度もあった。」とあるように、「夫に同調していた」わけではない。よって、②は不適。

③「息子の死後も明るさを失わない夫に不満といらだちを抱いていた」が誤り。郁子は「憎まれ口」を叩くこともあったが、夫が明るさを失わないことに不満やいらだちを感じていたわけではない。また、「時には夫のたくましさに助けられ」という記述は本文にないため不適切である。よって、③は不適。

⑤「互いに傷つけあった記憶があざやかであるだけに」という記述が誤り。郁子の「憎まれ口」によって俊介を傷つけることはあったが、郁子が俊介から傷つけられたことは本文中には書かれていない。よって、⑤は不適。

問5 18

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 内容説明型

解答範囲 〈Ⅲ〉(71～109行目、特に102～109行目)

解説

傍線部に「その必要はありません」とあるが、傍線部直前を見ると、これは校内の見学をするかという石井さんの提案についての郁子の返答だとわかるので、なぜ郁子が校内の見学をする必要がないと言ったのかを考える。傍線部直後の文では、「もうそれを見つけたような感覚があった」と述べられており、その後の部分では郁子が見つけた「それ」について述べられているので、その内容を把握していく。すると、高校時代の俊介について、106行目「頭の中に思い描いていた男子校の風景が、今、自分の中から取り出されて、眼前にあらわれたのだという気がした」とある。この「男子校の風景」は、「かつて俊介から聞いていた」ものであり、その話を聞かされるたびに、郁子は「その時代の俊介に会ってみたい」と思っていたのである。その風景が目の前に現れたことで、107行目「それが、ずっと長い間、自分の中に保存されていた」ことに気づき、「呆然とした」のだ。つまり郁子は、かつて俊介に話を聞いて思い描いていた若い俊介の姿が、長い間無意識に自分の中に刻まれていたことを実感して呆然としているのである。

傍線部の直後にこうした描写と郁子の思いが描かれていることを踏まえると、郁子が「その必要はありません」と言ったのは、校舎を外から見ただけで、生前の俊介から度々聞かされた高校時代の思い出話と相まって、俊介の若い姿が想起され、夫婦生活における時間や記憶の蓄積を実感できて満足したためである。こうした内容を過不足なく説明した③が正解となる。

また、正しい選択肢を探そうと、③以外の選択肢は、夫婦で過ごした時間や記憶が蓄積されていたことを実感したから、という結びになっていないという点で誤りとみなしてしまってもよかっただろう。

不正解の選択肢

①前半部は問題がないのだが、後半の「夫をいとおしむ心の強さ」について本文を通して特に述べられている部分は見当たらず、「あらためて確認」という表現は不適切である。

②ここで郁子が見ていたのは高校時代の俊介であり、「高校時代から亡くなるまでの夫の姿」という部分は誤りである。また、郁子がこのように答えたのは、前でも述べたように「夫婦での時間や記憶の蓄積を実感できたから」であり、「大切なことは記憶の中にある」という結論は本文から読みとれない。

④「ようやく許す心境に達し」という部分が誤り。郁子がなにかを許したという記述は本文にない。また、「自分の新しい人生の始まりを予感することができた」という部分も同様に誤りである。

⑤「今は彼のことをいたわってあげたい」という部分は、1行目や21行目で郁子が二頭の（草だけでなく俊介の分も）馬を作っている場面から、すでに俊介のことをいたわっていることが読みとれるため、適切ではない。また、「自分と夫は重苦しい夫婦生活からようやく解放された」という内容は本文から読みとれない。

問6 19 . 20

正解 ③・⑥

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 5分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 (I～III) (1～109行目)

解説

本文の表現の説明について正誤を判断していく問題であるので、適切でないものを選ぶことに注意しつつ、それぞれの選択肢について本文の該当箇所と照らし合わせながら確認していく。

①1行目～69行目、71行目～92行目、93行目～をそれぞれ見ると、71行目～92行目の部分だけ他の部分よりも会話が詳細に、より客観的に描かれている。また、それ以外の部分では、郁子の思考の流れの通りに場面が移り変わっているのも明らかである。したがって、この選択肢は正しい。

②22行目を見ると、「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい」の前にも、「帰りの牛がないけれど、べつに帰らなくていいわよねえ」など、明らかに郁子のその場での思いが描かれており、確かに一人称であることでより印象的になっている。したがって、この選択肢は正しい。

③87行目の「さすがに初対面の男性の腰に腕を巻きつけることはできなくて」という箇所は「他人に隠したい郁子の本音」だとも考えられるが、56行目・97行目では直前の記述に補足するような内容が述べられている。

したがって、「○の中に入れることによって、その内容が他人に隠したい郁子の本音であることが示されている」とするこの選択肢は誤りである。

④57行目とその直後を見ると、さまざまな場面での俊介が、「カメラに向かって照れくさそうに微笑み」、そうでないときは「いかにも愉しげに笑ったり、あるいはどこか子供みたいな熱心な顔で」写真に写っていることが述べられている。したがって、「夫のさまざまな姿に郁子が気づいたということが表現されている」とするこの選択肢は正しい。

⑤「名所旧跡」とは確かに「有名な場所や歴史的な事件にゆかりのある場所」を意味し、また86行目以降では俊介の母校など、本来の意味とは異なり

俊介にかかわりのある場所を訪れている。したがって、この選択肢は正しい。

⑥ 93行目の前後を確認すると、郁子が一度だけしか俊介の実家に訪れなかったことや、その理由が述べられているが、ここからは「悔やんでいる気持ち」はまったく読みとることができない。したがって、93行目の「のだった」には「郁子の悔やんでいる気持ちがあらわれて」というとするこの選択肢は誤りである。

以上から、適切でない選択肢、すなわち正解は③・⑥であることがわかる。

(昆野祐己、森岡桃子、阿部剛大)

2018年度 センター試験 本試験 国語

第3問 古文（評論）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	得意…15分 ふつう…18分 苦手…20分	本居宣長『石上私淑言』からの出題。江戸時代中期に成立した歌論である。歌・連歌の起源や定義、修辭技巧などについて、問答体で論じている。和歌の根底には「もののあはれ」があると主張して、歌の本質を明らかにしようとした。	本試験で歌論が出題されるのは2002年以来16年ぶりである。問答体という形式になじみのない受験生も多かったかもしれないが、本文には特に難しい単語もなく、内容を把握するのは容易であった。本文全体を概観する設問がなく、選択肢と本文の対応箇所がわかりやすい設問が多かったため、きちんと本文を読めれば正しい選択肢を選ぶことができただろう。ただし、問一（ア）については、単語の辞書的な意味にとらわれると間違えてしまうおそれがあるので注意が必要であった。 センター試験の国語は、読解の正確性だけでなく、スピードも求められる。問1や問2、また本文中のささいな単語でつまずいて時間を取られないよう、基礎的な単語や文法事

傾向と対策

項は盤石にしておこう。また、過去問演習とその復習を重ねることで効率よく問題を解く方法が身についてくる。時間制限をするなど本番に近い環境のもとでチャレンジしてみよう。

- 解答**
- 問1 (7) ①
問2 (7) ⑤
問3 ②
問4 ③
問5 ④
問6 ④

本文読解
本文を読み始める前に

前書きから、作者本居宣長の、和歌についての持論が展開されることがわかる。作者の主張に置いて行かれないように、頭の中でしっかりと理解しながら読み進めよう。必要に応じてラインを引いたり、メモを残したりするの
もよい。

通読

第1段落「問ひて云はくきはいか」

◎「尋ねているのは誰か？」と考える必要はない。「問答体の形式」という前書きからわかるように、本文は作者の自問自答になっているはずだ。

第2段落第1行～第3行「答へて云はくを知るべし」

◎『万葉集』では、すべての歌が雑歌・相聞・挽歌のいずれかに分類される。

特に、八巻と十巻では、恋の歌のみを相聞として分けて、あとは雑歌として一緒にたにされているという。恋の歌が多いのは、和歌の中心が恋だからだ。

★相聞歌は男女が恋を詠みあつた歌、挽歌は死者を哀悼して詠んだ歌、雑歌は相聞歌・挽歌以外の歌である。

第2段落第3行～第5行「そもいかなることなり」

◎恋が和歌の中心であるのは、恋は人の心にしみて、趣深い歌が生まれやすいからだ。

◎別段ひねったことを言っているわけでもないので、理解しやすい。

第3段落「問ひて云はくは詠まぬぞ」

◎身の繁栄を願い財産を求める心は抑えがたいものなのに、なぜ歌に詠まないのでか、という話題。「なるさま」は、「身の栄えを願ひ財宝を求むる心」を指している。

★「願ひ忍ぶ」は、「忍ぶ」に「隠す」という意味があることを思い出して、心の中でひそかに願っているようなイメージがわけば完璧。

★「色」は、古文では恋愛が絡んだときにしばしば見かける単語。「恋愛」

それ自体を指したり、「恋人」を意味したりする。文脈もヒントにして意味を推測できるとよい。

第4段落第1行～第2行「答へて云はくふものなり」

◎作者のいう「情」と「欲」がどのようなものなのかについて、きちんと理解しよう。「情」はすべての感情を含む。「情」のうち、何かを求めるような感情を「欲」として区別している。

★「と」「かく」はそれぞれ「そのように」「このように」を意味する副詞。よくセットで登場する。「まほし」は願望の助動詞なので、「あらまほし」「あり」+「まほし」で「あってほしい」という意味になる。

第4段落第2行～第4行「されば、こゝはいひける」

◎「情」はすべての感情を含んでいるが、とりわけ、「人をあはれと思ひつらしとも思ふやうの類」を「情」と呼ぶというわけだ。

★強意の係助詞「なむ」や詠嘆の助動詞「けり」がよく効いている。

★恋心はまさに、人を「あはれ」「かなし」「うし」「つらし」と思うこの「情」である。

第4段落第4行～第5行「さるはそのきゆゑなり」

◎「情の方」が「あはれ」であるため、「歌は情の方より出て来るもの」であるという。「情の方」とあるが、「情ではない方」はもちろん「欲」。「欲」から深い歌は生まれない。

第4段落第5行～第8行「欲の方の思くぬなるべし」

◎「欲」はひたすら願い求める心であり、繊細さに欠ける。

★「はかなき花鳥の色音にも涙のこぼるる」は「情」の話。「欲」はそれほどには深くない。

★「あはれ」である「情」からは歌が生まれ、「あはれ」でない「欲」からは歌は生まれない。歌の源泉は「あはれ」であるというのが作者の主張。

第4段落第8行～第10行「色を思ふもくと知るべし」

◎恋心もももとは「欲」から生じるもの。もっと相手と近づきたいといった気持ちは「欲」であろう。

◎そうはいうものの、恋心は「情」が占める部分が大きい。相手を素敵だと思ったり、冷たく感じて不安になったりするだろう。

◎「物のあはれ」をよく解する人間は、その「情」を深く感じて歌に詠むのだ、というのが作者の主張。

第5段落第1行～第2行「さはあれどゆるなめり」

◎人は「情」の方を深く感じるのに、後世では心の弱さを恥じて隠すことが多くなったために、「欲」より浅く見えるのだという。

★「つつむ」は「遠慮する」という意味。現代語でいう「つつむ」。

第5段落第2行～第4行「されど、こゝ思ひたらず」

◎しかし、歌だけは例外。「情」を詠み出す心は後世でも失われていない。「欲」は歌に詠むようなものだとは思われていない。

第6段落「まれまれにゝる」とぞや

◎作者の「欲」に対する嫌悪感が暴走……「心づきなく」「憎く」「さらになつかしからず」「何の見所も無し」「きたなき」「あはれならざる」と言い

たい放題。

★「酒を讀めたる歌」は、大伴旅人が酒宴の席で詠んだといわれる十三首の歌。以下はうち一首「なかなか人にとあらずは酒壺になりにてしかも酒に浸みなむ」（なまじり人であるぐらいなら酒壺になってしまいたい。酒浸りでいられることだろう。）

★「人の国」とは外国のことを指すが、注にもあるとおりここでは漢詩の話をしているので、中国に特定できる。

◎このような「欲」にまみれた和歌は珍しいが、外国（中国）の漢詩で、「情」を隠して「欲」ばかり言い合っているのは何事だ、という批判で締められている。

設問解説

問1 ～

解答 (7) ① (4) ③ (7) ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 現代語訳

解説

(7) 「あながちにわりなく」は「あながちに」と「わりなく」に分けて考える。「あながちなり」は「強引だ、ひたむきだ」という意味で、これを満たす選択肢は①だけである。そこで、①の「わりなく」の訳を見てみると、「抑え

がたく」とある。「わりなし」は漢字で書くと「理なし」であり、理性では割り切れない状態に対する気持ちを表すから、①の訳は何ら問題がない。な

お、「わりなし」の意味から選択肢を絞ったり、その辞書的な意味だけで考えたりしようとすると、誤答するおそれがあった。

(イ)

「いかにもあれ」は「どうであろうと・いずれにせよ」という意味の連語であり、これを満たす選択肢は③である。「いかにもあれ」を知らなくても、①と⑤は文脈的に不自然であり、「いかにも」の意味に②と④の選択肢の意味がないので、③を選ぶことはできた。

(ウ)

「さらになつかしからず」「は」「さらにさず」が「まったくない」という意味であるとわかれば、素直に⑤と選べただろう。なお、「なつかし」は「心ひかれる・親しみがもてる」という意味である。

問2 24

解答 ③

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 1分

設問パターン 文法

解説

波線部を品詞分解すると、「身(名詞)／に(格助詞)に(格助詞)に(格助詞)／しむ(動詞)／ばかり(副助詞)「ばかり」／細やかに(形容動詞)／は(係助詞)「は」／(断定の助動詞)「なり」の連用形(や)／(係助詞)「や」／(断)となる。これにもとづいて考えると、①と②と⑤は正しい。また、波線部のような挿入的な表現のときは、「にや」「は」「にやあらむ(ありけむ)」が省略された形と考えられる

ので、「や」は疑問の係助詞であり、④も正しい。なお、「にや」の「に」が断定の助動詞であるのも、「にや」が「にやあらむ(ありけむ)」の省略された形であるからである。よって、残った選択肢③が正解である。

「あらねば」の「ねば」は、打消の助動詞「ず」の已然形＋接続助詞「ば」であり、確定条件であって仮定条件ではないと考えて、③を選ぶこともできる。

問3 25

解答 ②

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明

解説

傍線部Aの問いに対する答えは、「答へて云はく」から始まる第2段落に書かれているはずである。中でも、作者の見解がはっきりと表れているのが、「そもいかなるゆゑなり」の一文。「ゆゑ」という単語に注目して的確なことが出来る。この文で述べられている、恋が他のどんな「情」にもまさって人の心に染みるから恋の歌が多いのだという趣旨は必ず選択肢に含まれていなければならない。これを正しく述べているのは②のみで、「恋の歌が上代から中心的な題材として詠まれている」という記述も、第2段落前半の内容に合致する。

①恋の歌が多いのは『万葉集』の影響ではない。『万葉集』は、恋の歌が多いことを示すために、作者が紹介した一例である。

③「相手への思いをそのまま言葉にしても、気持ちは伝わりにくい」という記述は本文にない。

④前半部分は事実だが、恋の歌が多く詠まれる理由にはなっていない。また、作者が言いたいのは「恋の歌は相聞歌のみならず四季の歌の中にもある」ということではなく、恋の歌だけを「相聞」と区別して他を雑歌とまとめるほど、恋が歌の中心とされたということである。「分類による見かけの数以上に多く」という記述は本文にはないし、そもそも論点がずれている。

⑤恋は、優雅な題材である「情」と密接に関係するものではあるが、「自分の歌が粗雑であると評価されることを避ける」という記述は本文にはない。

問4 26

解答 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明

解説

「情と欲のわきまへ」と恋の関係については、本文第4段落で述べられている内容を整理すればよい。

まず作者は、「すべて人の心にさまざま思ふ思ひ」を「情」、その「情」のうち、「とあらまほしくかくあらまほしと求むる思ひ」を「欲」と区別する。さらに、この人間の感情すべてを指す情（広義の情）の中でも、狭義の情とでもいうべき、「人をあはれと思ひ、かなしと思ひ、あるはうしともつらしとも思ふやうの類」の「情」があると説明する。この「情」は、「ひとすぢに願ひ求むる心」である「欲」とは異なり、「はかなき花鳥の色音にも涙のこぼるる」ような深い感情である。続けて作者は、これらの「情」「欲」と恋の関係について、「色を思ふも本は欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひ」と説く。つまり、恋は「欲」を発端とする感情でありながら、

「情」との間には「欲」以上に強い結びつきがあるというのである。

この本文の内容に合致するのは③である。「情」「欲」と恋の関係の整理、および「情」「欲」の内容に関する説明が本文の内容と一致する。

①2文目「情」と「欲」の違いに関する整理が本文の内容と異なる。「情」と「欲」の差は、「自分自身についての思いを生じさせる」とことと「恋の相手についての思いを生じさせる」とことの差ではない。

②「情」「欲」の整理が本文の内容と異なる。「情」「欲」を区別する「受動的」「能動的」という基準は、本文から読み取ることができない。また、3文目の内容も本文と矛盾する。恋は「欲」から生まれながらも「情」にも関係するような感情であって、「情」からはじまり「欲」へと変わるのではない。

④前半1・2文目は本文の内容と一致するが、本文から読み取れない内容を述べている3文目がおかしい。恋がもともと「欲」に分類されるというのは合っているが、恋が「誰かと一緒にいたい」という感情であるという説明は本文にない。また、恋と「情」のかかわりは、「恋を成就させるためには『欲』だけでなくさまざま感情が必要」であるという理由によつては説明されていない。

⑤1文目については、本文と明らかに矛盾する箇所はない。しかし、2文目『欲』は自然よりも人間に作った価値観に重きを置く」という説明は本文に見られない。また、3文目「恋は『欲』を源にすることはない」も本文と矛盾する。この解説でも繰り返し説明してきたように、「恋」のはじまりはあくまで「欲」にある。

問5

27

解答 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明

解説

④が適当である。選択肢の前半部分は、第5段落の「情の方は前にいへるやうに、心弱きを恥づる後の世のならばしにつつみ忍ぶこと多きゆゑに、かへりて欲より浅くも見ゆるなめり」と一致する。また、選択肢の後半部分は、同じく第5段落の「この歌のみは上つ代の心ばへを失はず」「人の心のまこととさまをありのままに詠みて、めめしう心弱き方をもさらに恥づることなれば」と対応している。

①『欲』のあり方は変わった」という記述はないので不適。また、「この歌のみは上つ代の心ばへを失はず」とあることから、「後世の恋の歌は、上代の恋の歌とは性質を異にしている」が誤りであることもわかる。

②「時代が経つにつれて人々の心から消えていった」が誤り。「情」とは「すべて人の心にさまざま思ふ思ひ」であり、後世では隠されることが多いという記述はあるが、人々の心から消えたとは言っていない。

③本文にこのような記述はないので不適。

⑤「歌はもともとは『欲』にもとづいて詠まれていた」が誤り。第4段落の「この欲といふものにて、物のあはれなるすぢにはうときゆゑに歌は出で来ぬるべし」という記述と矛盾する。『万葉集』の歌が振り返られることはなくなった」という記述もない。

問6

28

解答 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明

解説

歌と「物のあはれ」の関係は、本文第4段落最終文「その他もとにかくにつけて物のあはれなることには、歌は出で来るものと知るべし。」に明瞭に述べられているとおりである。これに対して、詩と「物のあはれ」の関係を直接述べた箇所は本文に見られない。しかし、詩を生み出す感情が「情」ではなく「あはれならざる」「欲」であることが第6段落で述べられており、これと第4段落の「欲」が「物のあはれなるすぢにはうとき」感情であるという記述を組み合わせれば、詩が「物のあはれ」とは異なる原理で作られるものであることは十分読み取れる。

この本文の内容に合致するのは④である。1文目前半「『情』は生きている者すべてが有する」というのも、第4段落「生きとし生けるもののみぬかれぬところなり。」とあり、本文中対応する箇所が見つかる。

①2文目の内容が本文には書かれていない。歌が詩と同じ対象を題材とした例として、本文中「酒を讃めたる歌」が挙げられているが、この題材の類似は「あはれ」「欲」の対象が国によって異なることによるものとしては説明されていない。

②後半の内容が本文に書かれてはいない。歌が詩と同じ題材を読むこと理由について、本文はふれていない。

③本文にこのような記述はないので不適。

⑤「歌も詩も『物のあはれ』を知ることから詠まれる」が本文と矛盾する。

先ほど整理した通り、「物のあはれ」にもとづくのは歌のみで、詩は「物のあはれ」とはかけ離れた「欲」から生み出されるのである。

本文解説

現代語訳

問うて言うことには、恋の歌が世間に多いのはどうしてか。

答えて言うことには、まず『古事記』『日本書紀』に見られる上代の歌をはじめとして、それぞれの時代の和歌集にも、恋の歌ばかりがとりわけ多い中でも、『万葉集』では相聞とあるのが恋の歌であって、すべての歌を雑歌、相聞、挽歌と三つに分け、八の巻、十の巻などでは四季の雑歌、四季の相聞と分けている。このように他の歌をすべて雑歌といっていることによつて、歌は恋を中心することを理解するはずである。そもそもどうしてこうである（＝歌が恋を中心とする）のかというと、恋はあらゆる感動にまさつて深く人の心にしみて、たいそう堪えがたいことであるからである。だから、とりわけしみじみとした情緒のある歌風はいつも恋の歌に多いのである。

問うて言うことには、総じて世間の人々がいつも深く密かに願うこととしては、恋心を抱くことよりも、身の繁栄を願い財産を求める心などは、ひたむきで抑えがたくみえるようなのに、どうしてそのようなことは歌に詠まないのであるのか。

答えて言うことには、情と欲の区別がある。まず総じて人が心にさまざまなに思う思いは、みな情である。その思いの中でも、あああつてほしいこうあつてほしいと求める思いは欲というものである。そうであるので、この二つは互いに離れないものであつて、一般には欲も情の一種であるけれども、またとりわけ、人のことをしみじみと思い、愛しいと思い、あるいは嫌だとも

薄情だとも思うような類を情と言つたのだよ。そしてその情から出て欲にも及び、また欲から出て情にも及んで、一様ではなくさまざまであるが、どのようなであつても、歌は情の方から出てくるものである。これは、情の方の思いは何事につけても感受しやすく、しみじみと感ぜられることがこの上なく深いからである。欲の方の思いはひたすらに願い求める心に過ぎず、それほど身にしみくるくらい繊細ではないからであるうか、ちよつとした花の色や鳥の声も涙がこぼれるほどは深くない。あの財産をむさぼるような思いは、この欲というものであつて、「物のあはれ」である方面には関係が薄いために、歌は出てこないものであるにちがいない。恋心も、もともとは欲から出るけれども、特に情の方に深くかわる思いであつて、この世に生きるすべてのものが避けられないところである。まして、人は特別「物のあはれ」を知るものであるので、特に深く心にしみて、感に堪えないのはこの思いである。そのほか何事につけても「物のあはれ」であることには、歌は出てくるものと心得ておきなさい。

そうであるけれども、情の方は前に言つたように、心が弱いことを恥じる後世の習慣においてつつみ隠すことが多いために、かえつて欲よりも浅くも見えるのであるようだ。けれども、この歌というものだけは上代の風情を失っていない。人の心の本当のありさまをありのままに詠んで、女々しく心が弱いところをもまったく恥じることがないので、後世に至つて上品で優雅に歌を詠もうとする際には、いっそう「物のあはれ」である点だけを中心として、例の欲に関することはすっかり忌み嫌つて、歌に詠むようなものとも思っていない。

珍しいことにもあの『万葉集』の三の巻にある「酒を讃めたる歌」の類は、漢詩ではふつうのことであつて、このような類のものばかり多いけれど、歌ではたいして面白みがなくいやだとまでも思われて、まったく心惹かれな

何の見所もないよ。これは、欲はけがれた感情であって、しみじみと身に染みる感情ではないからである。そうであるのに、外国（＝中国）では、しみじみとした情を恥じて隠して、けがれた欲を素晴らしいものと言いついているのはどういふことか。

用語解説

よ【世】 ①男女の仲 ②世間 ③治世

いかに ①いかに ②なぜ

かみ【上】 昔・当時

あはれ ①しみじみとした趣 ②情け

いみじ ①非常に ②恐ろしい ③素晴らしい

わざ【業】 ～こと

しのぶ【忍ぶ】「自バ上二」「自バ四」①隠す ②我慢する

あながち【強ち】 強引だ・ひたむきだ

わりなし【理なし】 ①道理にあわない ②つらい

など どうして

なべて【並べて】 ①ふつう ②すべて

かなし【愛し・悲し】 ①かわいい ②悲しい

うし【憂し】 つらい・冷たい

つらし【辛し】 薄情だ・冷たい

こよなし この上ない

はかなし つまらない

さらに (打消を伴って) まったくなくない

いふなり【優なり】 ①優美だ ②すぐれている ③心が優しい

なまめかし 優美だ・奥ゆかしい

こころづきなし【心付きなし】 気に食わない
にくし【憎し】 不愛想だ・不格好だ
なつかし【懐かし】 親しみやすい

(松田朋佳、坂部和希、田村進也)

2018年度 センター試験 本試験 国語

第4問 漢文

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	得意…13分 ふつう…15分 苦手…20分	<p>李燾『続資治通鑑長編』</p> <p>作者は南宋の史学者。科挙合格後、二十数年間、四川省州の地方官を歴任した。『続資治通鑑長編』は司馬光の『資治通鑑』に続ける目的で書かれた宋の太祖から欽宗までの9朝の編年体の歴史書で、北宋時代の出来事が詳細に書かれている。</p>	<p>分量は187字でさほど長くはなかった。難易度は2017年度より易化した。寇準と王嘉祐の会話が中心で、文章の内容自体の読解は難しくなかったと思われる。嘉祐は寇準が宰相になることに反対する立場であることとその理由を読み取ることが最大のポイントであった。出題の傾向は例年とほぼ同じであった。</p> <p>会話の内容も漢文で頻出の君臣関係に関するものであったため比較的読みやすく、愚かな人物のようだと冒頭で言われていた嘉祐が実は思慮深く見識高い人物であったことがわかるエピソードとなっている。</p> <p>解き方としては、まず本文を通読したあとで本文に沿っ</p>

傾向と対策
<p>て</p> <p>問2↓問1X↓問3↓問1Y↓問4↓問5↓問6</p> <p>という順番で解く、というスタンダードな解き方が最も効果的だったと思われる。</p> <p>設問は読みや句形を直接問う単純な問題がなく、丁寧に文章を解釈していくことが求められた。</p> <p>問1・2は複数の意味をもつ漢字から文脈に沿う解釈を選択する必要があった。</p> <p>問3は傍線部の書き下しと解釈の問題。基本的な句形の知識を活用し、嘉祐が寇準の去就に関してどのような立場であるかを読み解く必要があった。</p> <p>行為の主体・客体を正しく判断する問4は君主が臣下の意見を聞く理想的な君臣関係を想起できることから即答したい。この問題に限らず文章を読みながら常に行為の主体・客体を意識するクセをつけよう。</p> <p>問5は傍線部直前で良好な君臣関係を築けないのではと疑っていることや、それによって誰の誰に対する期待が失われるのかを正確に読み取ろう。</p> <p>問6では文人として名高い父親を引き合いに出しつつも、嘉祐の思慮の深さや見識の高さに対して賛辞を送っていることを読み取れば正解できた。</p>

本文解説

赤は重要語句

青は覚えておくとよい語句

書き下し文

嘉祐は、禹偁の子なり。嘉祐は平時は愚駿のときも、独り寇準の
 みをしる。準、開封府に知たり、一日、嘉祐に問ひて曰はく、「外間
 準を議すこと云何。」と。嘉祐曰はく、「外人皆文人、旦夕入りて相
 たらんと云ふ。」と。準曰はく、「吾子に於いては意ふこと何如。」と。
 嘉祐曰はく、「愚を以て之を觀るに、文人未だ相と為らざるに若かず。
 相と為れば、則ち譽望損なはれん。」と。準曰はく、「何の故ぞ。」と。
 嘉祐曰はく、「古より賢相の能く功業を建て生民を沢す所以は、其
 の君臣相ひ得ること皆魚の水有るがごとくければなり。故に言聽かれ計
 したはれ、而して功名俱に美なり。今文人天下の重望を負ひ、相
 たれば、則ち中外太平を以て責めん。文人の明主に于けるや、能く
 魚の水有るがごとくか。嘉祐の譽望の損なはれんことを恐るる所以なり。」
 と。準喜び、起ちて其の手を執りて曰はく、「元之は文章は天下に冠
 たりと雖も、深識遠慮に至りては、殆ど吾子に勝る能はざるなり。」
 と。

現代語訳

王嘉祐は王禹偁の子である。嘉祐は普段は愚かなようであったが、寇準だ
 けがこれ（＝嘉祐が愚かでないこと）を知っていた。寇準は開封府の知事を
 務めており、ある日、嘉祐に「世間は私をどのように論評していますか。」
 と質問した。嘉祐は「世間の人々は皆、あなたは間もなく朝廷に入って宰相
 になるだろう、と言っています。」と言った。寇準は「あなたは（私につい
 て）どのように思いますか。」と言った。嘉祐は「私からこれ（＝あなた
 について）見解を述べると、あなたはまだ宰相とならないほうがよろしいでし
 よう。もし、（あなたがいま）宰相となれば、（あなたの）名声は損なわれる

でしょう。」と言った。寇準は「なぜですか。」と言った。嘉祐は「昔から、
 賢い宰相が功績を立て人々に恩恵を施すことができた理由は、その君主と宰
 相とがきまつて魚が水を得たかのような（極めて良好な君臣）関係を築くこ
 とができたからです。そのような関係にあるから（こそ）、（宰相の）進言は
 君主に聞き入れられ、（宰相の）考えは君主に従ってもらえ、（宰相の）功績
 と名譽はどちらも素晴らしいものとなるのです。いまあなたは世間から厚く
 期待されており、宰相になったら國中（の人々）が太平を（あなたに）求め
 るでしょう。あなたは皇帝と、魚が水を得たかのような（極めて良好な君臣）
 関係を築くことができるのですか。（以上が）私が（あなたの）名声が損な
 われるのではないかと危惧する理由です。」と言った。寇準は喜び、立ち上
 がって嘉祐の手を握って「（あなたの父である）元之は、文章（の才能）こ
 そ天下で最も優れていたが、見識の高さと思慮の深さにおいては、おそらく
 あなたを超えられないでしょう。」と言った。

文法解説

「若」のおもな意味は以下のとおり。①比況の返読文字「ごとく」、②仮定
 の副詞「もし」、③「〜に及ぶ」という意味の動詞「しく」（おもに否定とと
 もに用いられる）。「こ」での「若」は、①の比況の返読文字で「嘉祐」が「愚
 駿」のようだ、という内容を表している。

「独」は「ひとり」（スル）ノミ」と読んで、「ただりだけだ」という限定
 の意味を表す。「ひとり」と読むが、人間を表すわけではないことに注意し
 よう。

「知」は現代で使われる「理解する」などの意味のほかに、「知十（地名も
 しくは物事）」で「土地もしくは物事」をつかさどる」という意味ももつ。
 この文では、寇準が開封府を治めているという内容を表している。

「一日」のおもな意味は以下のとおり。①朝から晩まで。終日、②ある日。

「こ」では、②の意味で用いられている。

「何如」は「いかん」と読んで「どうであるか」という意味を表す。「どうすればよいのか」という意味を表す「如何」と混同しないように注意。「何若」「奚如」「奚若」も同様に用いられる。

「以」は「もつて」と読む返読文字で、おもな意味は以下のとおり。①手段・方法「く」で、②理由「く」ので、③目的「く」を。3行目の「以」は①の意味で用いられていて、私で之を観る、すなわち私から之を観るという内容を表している。また、7行目の「以」は③の意味で用いられていて、国中の人が太平を求めるといふ内容を表している。

「未」は「いまだくず」と読み「まだくずない」という意味を表す再読文字として、類出の漢字。ただし、「くまれに」「いまだくず」と読んでも「不」と同じように単なる否定の場合もある。「こ」では前者の典型的な用法。

「若」のおもな解釈は前述のとおり。①比況の返読文字「く」とシ、②仮定の副詞「もシ」、③「く」に及ぶ」という意味の動詞「しく」（おもに否定とともに用いられる）。4行目では③の意味で用いられていて、「不若く」で「く」に力ず」と読み「くにおよばない」すなわち「く」のほうがよい」という意味を表す。また、7行目では①の意味で用いられている。

「則」は「レバ、すなはち」と読み、仮定条件・確定条件を表す。古文とは異なり、「已然形十バ」でも仮定条件を表すことがあるので、文脈から判断しよう。4行目と6行目の「則」はどちらも仮定条件を表している。

「能」は肯定文では「よく」と読み、否定文では「あたはず」と読んで、それぞれ可能と不可能の意味を表す。

「所以」のおもな解釈は以下のとおり。①理由・原因を示す、②方法・手段を示す、③こと・ものを示す、④結果を示す。5行目と7行目の「所以」はどちらも①の意味で用いられている。

「相」は「あひ」と読む副詞で、おもな意味は以下のとおり。①相互に、「②次から次へ」、③動作の対象が存在することを表す用法（訳さない）。「こ」では③の意味で用いられていて、君臣が互いを得ることは魚に水が必要であるようなものだ、という内容を示している。

「如」は「若」と同様に①比況の返読文字「く」とシ、②仮定の副詞「もシ」、③「く」に及ぶ」という意味の動詞「しく」（おもに否定とともに用いられる）の三つの意味をもつ。「こ」では①の意味で用いられている。

「而」のおもな解釈は以下のとおり。①順接の接続詞「しかシテ・しかウシテ」、②逆接の接続詞「しかルニ・しかモ・しかレドモ」、③二人称の代名詞「なんぢ」。接続詞として使われる場合には、前述のように読む方法以外に、「而」を置き字扱いにして、直前の動詞に順接なら「く（シ）テ」、逆接なら「く（下）モ」などと送って読む方法もある。「こ」では、送り仮名から、①の順接の接続詞の意味であることがわかる。

「雖」は「ト、いへドモ」と読んで、逆説確定条件・逆説仮定条件を表す。確定条件を表すか、仮定条件を表すかは文脈から判断する。「こ」では逆説確定条件を表している。

要約

簡潔かつ要点をおさえた要約を書く練習をすれば、二次試験対策にもなる。作者が丁寧に展開した論理のつながりを反映するよう意識しつつ、全体で150字以内を目標に書いてみよう。以下に要約の例を挙げたので参考にしよう。

普段は愚かなようである嘉祐の眞の能力を知るのは寇準のみだった。寇準が宰相になるだろうという世論に対し、寇準が皇帝との間に良好な君臣関係を築くことができないうため、功績を立て人々に恩恵を施すことができないう

嘉祐は考えて、いまはまだ宰相になるべきではないと言った。寇準は嘉祐の高い見識と思慮深さをたたえた。(150字)

設問解説

知識と文脈にもとづく自分なりの解釈に照らして、それぞれの選択肢を吟味していこう。

次の二つのパートに分かれている。

思考方法

限られた知識と時間の中で、受験生が漢文に立ち向かうテクニクを示した。教科書や辞書が一切使えない「試験場での解法」なので、詳細な文法解説などは省略する。

解説

詳細な解説を載せてある。実力を養成するために読んでほしい。

問1 29

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分

設問パターン 文中の漢字の意味

思考方法

まず、二重傍線部Xを含む一文とその直後の文を見ると、寇準が嘉祐に「世間が私を『議』すことはどのようか」と尋ね、それに対して嘉祐が「世間の人々は皆、あなたは間もなく朝廷に入って宰相になるだろう、と言っているま

す。」と答えている。

ここで、各選択肢を見る。「寇準が宰相になる」というプラスの内容の返答にそぐわないので、②⑤を消去。

次に、二重傍線部Y「沢」を含む一文を見ると、「自古」で始まっていて、この文では昔からの一般論を述べているとわかる。

ここで、各選択肢を見ると一般論に適さない具体的な内容である①②④は消去。

よって、解答はこれら二つの漢字の意味が最も適当な③。

解説

二重傍線部X「議」を含む一文において「議」は動詞として用いられている。「議」は動詞として用いられると、「ここで使われているように「ギス」と読んで「是非を評論する」という意味になるほかに、「はかる」と読んで「相談する」、「そしル」と読んで「非難する」という意味ももつ。

「沢」は動詞として用いられると、「うるほス」と読んで「水分をあたえる・恩恵を施す」という意味になる。

問2 30 、 31

正解 I ① II ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 返り点の施された文の解釈

I

思考方法

まずは「若愚駭」の意味を考えよう。送り仮名に注目すると、「ノノ『若

キモ」という構造が見える。よって、この「若」は「ことき」と読み、現代語訳は「くのようなだ」であることがわかる。送り仮名の「モ」は逆接確定条件を表す接続助詞なので、「若愚駭」を書き下すと、「愚駭の「こときも」となり意味は「愚かなようであったが」となる。

次に、寇準と嘉祐の関係性について考えてみよう。本文3行目まで読むと、寇準が世間での自分の評判を嘉祐に聞き、さらに自分が宰相になることについての嘉祐の考えを尋ねていることが読み取れる。ここで「若愚駭」との矛盾に気づいてほしい。もし寇準が嘉祐を愚かな人物だと思っていたなら、これほど重要な相談をしただろうか？ 寇準は嘉祐のことを愚かな人物ではなく、むしろ賢い人物だと思っていたのではないかと推測できる。

以上より、「嘉祐は愚かなようであったが、寇準だけが『知之』。ゆえに寇準は嘉祐に重要な相談をした」という構造が読み取れる。よって「知之」は「寇準は嘉祐が愚かな人物ではないことを知っていた」という意味であることがわかる。

よって、解答は①。

解説

平時と乱世という対比から②を選んだ人もいるかもしれないが、この「平時」は「平和な時・何事もない時」という意味ではなく、「普段」という意味で用いられているのでこの対比は成立しない。

II

思考方法

まずは(注5)を確認し、「開封府」が北宋の都であることを頭に入れておこう。波線部IIを見ると、動詞「知」+目的語「開封府」という構造が読み取れる。「知」を「知っている」として訳してみると「開封府を知ってい

る」となるが、この訳に合う選択肢はない。ここで、「知」の目的語が「開封府」という地名であることから「知」が「(地名を)治める」という意味ももつことを想起できれば、正解を選べるだろう。また、(注4)を見ると寇準が北宋の著名な政治家であるということが書いてあるので、そこから推測できたかもしれない。

よって、解答は③。

解説

「知」は現代で使われる「理解する」などの意味のほかに、「知+地名もしくは物事」で「(土地もしくは物事)をつかさどる」という意味ももつ。

問3

正解 (i) ④ (ii) ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 白文の解釈

思考方法

まず傍線部Aの前半を見ると、再読文字「未」が用いられている。「未」は「いまだくず」と読み「まだくずない」という意味を表す。また、「若」が否定とともに使われていることから、「く」に及ぶ」という意味の動詞「しく」として用いられているとわかる。「不若く」で「く」に及ばず」と読み「く」のほうがよい」という意味を表す。

一つ前の嘉祐の発言で「世間の人々は皆、あなたは間もなく朝廷に入って宰相になるだろう、と言っています。」とあることから傍線部Aの「為相」は「宰相に為る」という意味であると推測できる。

これらを踏まえると、書き下しとして考えられるのは①④、現代語訳とし

て考えられるのは③⑤。⑤の現代語訳になる書き下しの選択肢は存在しないが、③の現代語訳になるのは、④の書き下しである。

よって、解答は(i) ④ (ii) ③。

解説

まず傍線部A第1文について解説する。「文人」は(注7)より「あなた」の意味。「未」は先ほど述べた「まだくはない」の意味のほかにも、「不」と同じ単純否定の意味をもつがここでは前者の意味である。「相」は「宰相」の意味である。「相」自体に「君主を助ける臣下」の意味があるが、これは本文3行目「く入りて相たらんと云ふ」とあり、「入」が(注9)より「朝廷に入って役職に就く」の意味であることから推測できる。先ほど述べたように「不若く」は「くのほうがよい」という意味で、今回は「若」の直後に否定語「未」があるため「まだ『為相』しないほうがよい」という意味になっている。

次に第2文について解説する。「則」は「レバ則」といわれるように「くレバすなはち」と読んで、仮定条件もしくは確定条件を示す。「則」の直前の部分に原因・仮定、直後の部分に結果があることが多い。「誉望」は名譽と人望という意味で、ここでは寇準の名譽と人望という意味である。

問4 34

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 送り仮名の施された文の解釈

思考方法

傍線部B直前の「故」は、「だから」という意味の接続詞である。そこで、

さらに前の「其君臣相得皆如魚之有水」という部分に注目する。(注13)より「如魚之有水」は「君臣の関係が極めて良好であるさま」という意味である。

ここで君臣関係一般について考えると君主の「言」や「計」はたとえ君臣関係が悪くとも当然臣下に「聴かれ」「従はれ」るものである。その一方で、臣下の「言」や「計」は君臣関係がよくなければ君主には「聴かれ」「従はれ」ないものである。傍線部B直前に接続詞「故」があることを踏まえると、傍線部Bは『臣下』の『言』や『計』が『君主』に『聴かれ』『従はれ』る」という意味だと考えるのが自然である。ここでは、臣下にあたるのは「賢相」、君主にあたるのは「君」である。

よって、解答は③。

解説

傍線部Bにある「言」「計」はそれぞれ「主張」「考え」を表す。

「如魚之有水」は「魚」が君主、「水」が臣下の比喩である。「水魚の交わり」という故事成語を連想するとわかりやすいかもしれない。

漢文では君臣関係(特に臣下が君主をいさめる場面)に関する内容の文章が多いことを意識するとよりスムーズに解答を導ける。

問5 35

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 理由説明

思考方法

傍線部Cを現代語訳してみると、「(以上が)私(嘉祐)が(あなた)寇

準の) 名声が損なわれるのではないかと危惧する理由です。」となり、傍線部Cの前にその理由があることがわかる。

嘉祐が傍線部Cのように述べた理由が説明されているのは傍線部Cの前の二文「今文人負天下重望、相則中外以太平責焉。文人之于明主、能若魚之有水平。」である。(注6)から推測できるように「中外」は「朝廷の内と外、すなわち国中」であることを踏まえて、前半部を現代語訳すると、「いまあなたは世間から厚く期待されていて、宰相になったら、国中(の人々)が太平を(あなたに)求めるだろう。」となる。ここで選択肢を見て、寇準に対して期待する主体が「宰相」や「皇帝」となっている①③⑤は消去。残りの選択肢②④を見ると違いは後半部の条件節だとわかる。

ここで傍線部C直前の一文を見ると、傍線部B直前にも登場した「魚之有水」がここでも登場していて、寇準と明主との間の君臣関係が良好なものになるのか嘉祐が疑問に思っていることがわかる。

よって、解答はこの内容が過不足なく含まれている②。

解説

嘉祐は自らの考える君臣関係について傍線部Bの前で述べていて、能力ある宰相が功績をあげ、人々に恩恵をもたらすことができるのは君臣の関係が極めて良好であるからであり、それゆえに宰相の助言を君主は聞き入れ、宰相の考えに君主は従い、功績もそれによる名誉もどちらも素晴らしいものとなるのである、と嘉祐は考えている。

能力ある宰相が人々に恵みをもたらすには君臣関係が極めて良好であることが必要だと考えている嘉祐は、寇準が皇帝と良好な関係を築けるのか疑問視している。そのため君臣間で極めて良好な関係を築くことができずに人々の厚い期待に応えられず、寇準の名誉や人望が傷つくことを恐れている。

問6 36

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明

思考方法

まず、傍線部Dを書き下すと「殆ど吾子に勝る能はざるなり」と。「殆」は、「ほぼ・おそらく」という意味。意味は「(嘉祐の父は)おそらくあなた(嘉祐)にはかなわない」。

傍線部Dは嘉祐の発言を受けた寇準の発言の中にあるので、傍線部Dを含む発言を寇準にさせた原因である嘉祐の発言について振りかえる。王嘉祐は、問3で見たように「寇準はいま宰相となると名誉や名声を失うだろうから、まだ宰相とならないほうがよい。」と進退について助言している。その根拠として、問4・5で見たように「宰相は君主と極めて良好な関係にあつてこそ活躍できる。しかし、寇準がいま人々の期待を受けて宰相になっても、皇帝と極めて良好な関係を築けなければ人々の期待に応えられない。」と皇帝と宰相の政治的関係を指摘している。

よって、解答はこの内容が過不足なく含まれている④。

解説

傍線部Dで述べられている嘉祐の父が嘉祐にかなわない点とは、直前にある「深識遠慮」な点である。「深識遠慮」は、「識」が「見識」、「慮」が「思慮」の意味なので、「見識高く思慮深い」という意味である。

①を選んだ人もいるかもしれないが、前半部の内容自体は本文の内容と矛盾しないものの、寇準が嘉祐を称賛した直接的な理由は嘉祐が宰相のあり方について理解していたからではないため、傍線部Dの説明としては不適切で

ある。

通読

問題集や模擬試験の解説を読んで、偉そうに淡々と説明するだけの解説者に憤った経験はないだろうか。「ここまで正確に読めたらそりゃあみんな満点取れるよ！でも試験中は教科書も辞書も使えないし、時間もないからムリに決まってるじゃん(怒)」と。本当にそのとおりだ。そこで、限られた知識と時間の中で受験生が漢文に立ち向かう術をこの《通読》に示した。教科書や辞書が一切使えない状況を想定した「試験場での読み方」なので、ここでは詳細な文法解説などを省略する(詳細な解説は《本文の読解》に載せてある)。自分の通読法に不安がある人は、ぜひ本文を通読するうえでの参考にしてほしい。

通読の読み方

本文は太字にしてある。

◎: 限られた知識と最低限の文法事項をフル活用して、なんとか内容を理解するうえでのポイント。まずはこのレベルを目指そう。

★: 漢文が得意な人の心の声。偏差値65、あるいはさらに上を目指す人はこのレベルが目標。

読解の基本

ひねった問題は出題されないので、基本的な文法知識と語彙があればほとんど読める。わからない字が出てきたら、その字を含む熟語をいくつか連想して文脈に当てはめてみよう。それでもわからなければ周りの文を見よう。

似た意味の字・表現や、対比になる字・表現があればそこから類推できる。どうしてもわからなければとばそう。心持ちとしては、面倒くさがりながら読むのではなく「うんうん、なるほど、それでそれで？」と問いかけてあげるように読むとよい。

それでは、通読開始！

嘉祐は、禹偁の子なり。嘉祐は平時は愚駭のことも、独り寇準のみ¹知^レ之^レ。

◎「愚駭」は(注3)より「愚かなこと」。「之」とはなんだろう。直前のものを指しているとしたら、「嘉祐が禹偁の子である」という事実か「嘉祐が愚駭のようだ」という事実のどちらかだけど、「ただ寇準だけが『之』を知っている」という文脈には合わないな。

★「嘉祐は普段は愚かなようだ『が』、ただ寇準だけが『之』を知っている」というように「之」の前が逆接の接続詞でつながっていることを考慮すると、「之」の内容は逆接の接続詞の前にある内容と逆の内容、すなわち「嘉祐は実は愚かではない」ということを指しているのかもしれない。とする

準^{II}知^レ開封府^一、一日、嘉祐に問ひて曰はく、「外間^{II}準を^レ讒^レ云何^一。」と。

◎(注5)より「開封府」は北宋の都だった場所、「外間」は「世間」。「一日」は「朝から晩まで」という意味と「ある日」という意味があるけど、ここでは後者の意味だな。寇準は嘉祐に世間での自分の評判を尋ねているようだ。

嘉祐曰はく、「外人皆丈人旦夕入りて相たらんと云ふ。」と。

◎(注7)より「丈人」は「あなた」、「旦夕」は「すぐに、間もなく」、「入」は「朝廷に入つて役職に就く」。「外人」の「外」はおそらく「外間」の「外」で「世間の人」みたいな意味だろう。「相」はここでは「宰相」という意味。世間の人は寇準がすぐに宰相になると思っているんだな。

準曰はく、「吾子に於いては意ふこと何如。」と。

◎(注10)より「吾子」は「あなた」という意味。寇準が今度は嘉祐の意見を尋ねているな。

嘉祐曰はく、「愚を以て之を觀るに、丈人不若未為相。為相則譽望損矣。」

◎(注11)より「愚」は「私」の意味。「愚を以て之を觀る」とは「私を手段として之を觀る」、すなわち「私から之を觀る」という意味である。「之」とは先ほどから寇準が尋ねている「寇準」自身のことを指している。「未」は「まだくない」という意味の再読文字。「若」にはいろいろな用法があるけど、否定とともに用いられているから「〜に及ぶ」という意味の動詞だな。「則」は「レバ則」で有名な接続詞、ここでは寇準はまだ実際に宰相になっているわけではないから、順接仮定条件。「譽望」は「名譽」の「譽」と「人望」の「望」の二字から構成されているし、きつと「名声」みたいな意味だろう。嘉祐は世間の人とは逆で寇準がまだ宰相にならないほうがいい、と考えているようだ。どうしてだろう？

準曰はく、「何の故ぞ。」と。

◎「故」は「理由」の意味。寇準が嘉祐にその理由を尋ねている。そりや氣

になるよね。

嘉祐曰はく、「古より賢相の能く功業を建て生民を、沢所以は、其の君臣相ひ得ること皆魚の水有るがごとければなり。」

◎(注12)より「生民」は「人々」の意味で、(注13)より「如魚之有水」は「魚に水が必要であるようなものだ、君臣の関係が極めて良好であるさま」の意味。「所以」はいくつか意味があるけど、ここでは原因・理由を表しているのだろう。優秀な宰相が功績をあげ、人々に恩恵をもたらせたのは君臣関係が良好だったかららしい。

故に言聴かれ計従はれ、而して功名俱に美なり。

◎「故二」は「だから」の意味。「而シテ」は順接の接続詞。

今丈人天下の重望を負ひ、相たれば則ち中外太平を以て責めん。

◎「重望」はそのまま訳せば「重い望み」、わかりやすくすると「厚い期待」みたいな意味だろう。「中外」はよくわからないけど、皆みたいな意味だろう。寇準はいますごく期待されているから、宰相になったら太平を求められるだろう、と嘉祐は言っているが、そのどこが問題なのだろうか。

丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るがごときか。嘉祐の譽望の損なはれんことを恐るる所以なり。」と。

◎文末の助詞の前が連体形で終わっているから疑問形だな。嘉祐は寇準と皇帝がよい関係を築けるかを疑問視しているようだ。なるほど！よい関係が築けなければ、功績をあげることも人々に恩恵をもたらすこともできないから宰相にならないほうがよいと嘉祐は言っているのか！！

準喜び、起ちて其の手を執りて曰はく、「元之は文章は天下に冠たりと雖も、深識遠慮に至りては、殆ど吾子に勝る能はざるなり。」と。

◎「雖」は逆接確定条件もしくは逆接仮定条件を表す接続詞、今回は接続詞の前に「元之は文章は天下に冠たり」という事実が述べられているので、逆接確定条件を表す。「深識遠慮」はよくわからないけど、「見識の高さや思慮深さ」というような意味だろう。寇準は嘉祐の発言を聞いて、その深識遠慮は嘉祐の父を圧倒しているとひどく称賛している。

(若杉柁志、斎藤ちひろ、上野仁士郎)